

●ヴァードリーによるレオ・ブローウェル記念コンサート

レオ・ブローウェルが、ニューヨークの92番街Yにあるカウフマン・コンサート・ホールで公演をしたのは1980年4月26日のこと。それから31年たった2011年4月23日、ベンジャミン・ヴァードリーが、芸術監督を務めてこの作曲家の功績を称えた記念コンサートを開いた。作曲家のカルロス・ラファエル・リベラが書いたプログラム・ノートによると、ヴィラ＝ロボスや、タレガ、グラナドスなどの音楽を愛した医者であるブローウェルの父は、レオに対して、こうした作曲家の作品を耳でおぼえて弾くように薦めたという。初期のブローウェルに影響を与えたのはキューバの民族音楽だが、60年代、70年代になって彼が興味を持ったのは、ルイジ・ノーノ、ヤニス・クセナキス、ハンス・ヴァルナー・ヘンツェといった現代作曲家の音楽だった。ブローウェルはニューヨークのジュリアード音楽院でヴィンセント・ベルシチェッティ (Vincent Persichetti) に作曲を学び、その後コネチカット州のハート音楽院で教職に就き、アバンギャルド音楽との接点ができた。その頃、映画“Like Water for Chocolate”の音楽を担当した。

コンサートの幕開きは、カナダ・ギター・カルテット (ジュリエン・ピサイリオン、フィリップ・カンデラリア、ブルーノ・ロウセル、ルイス・トレパニア) による〈雨のあるキューバの風景〉の演奏だった。ブローウェルがこの作品

を書いたのは、フランドール・バロックの風景画を見て、それに触発されたという。音楽的に表現された雨の降り始めは、ポツン、ポツンと優しく、間をおいて降るが、やがて愉快などしゃ降りになっていく。嵐のような雨が、田園地帯を素早く通り抜け、パターンを変えながら、やがて初めと同じように優しくなっていく。カナダ・ギター・カルテットはオタワ大学の専属アンサンブルだが、彼らが2007年にアメリカでデビューした場所は、92番街Yのカウフマン・コンサート・ホールだった。

レネ・イスキエーロは、ブローウェルの〈カンティクム〉と〈舞踏礼賛〉を甘い音で正確に演奏した。この2曲が作曲されたタイミングは、4年離れているので違った作品のようにみえるが、相互にリンクしている。2曲とも短い2楽章からなり、繰り返される開放弦の低音が共通している。〈舞踏礼賛〉は、もともとハバナの振付師ルイス・トラバガのために作曲された作品で、極めて民族音楽

的であり、第2楽章はバレッツ・ラッセスとストラヴィンスキーに捧げられている。キューバ出身のイスキエルドは、エール大学の卒業生で、現在はミルウォーキーにあるウイスコンシン大学の学部に所属している。彼はアマデオ・ロランド音楽院とハバナの高等芸術研究所でも学び、在学中はヘスス・オルテガに師事した。

ベンジャミン・ヴァードリーが演奏したブローウェルの〈シンプル・エチュード第6番〉は、水面に波紋が広がるようなアルペジオが特徴で、有名なロックギタリストのランディー・ローズが、オジー・オスボーンの〈Diary of a Madman〉のオープニングにこれを引用している。続いてヴァードリーが演奏したブローウェルの〈永劫の螺旋〉は、3音のテーマとピッチカートと最後にはフェイドアウトする指板のタッピングで構成されている。

リカルド・コボは、〈11月のある日〉



ラファエラ・スミツ

と〈黒いデカメロン〉を感動的なスタイルで演奏した。〈11月のある日〉の原曲はギター、フルート、ベースと打楽器の編成で、映画〈Humberto Solas' 1982〉のために作曲されたもの。〈黒いデカメロン〉は、ギタリストのシャロン・イズビンのためにブローウェルが書いた作品で、20世紀初頭ドイツの人類学者レオ・フロベニウスによって蒐集されたアフリカの民話の中にある景色やイメージから着想を得て作曲された。ギタリストのリカルド・コボは、彼の文化活動が高く評価されてコロンビア政府から表彰され、現在はラスベガスにあるネバダ大学のギター科主任教授である。

クリストファー・ステルは、レオ・ブローウェルの穏やかで甘い独奏曲〈魅惑の瞳〉を演奏したが、これはアフリカとスペインとアンデスの影響をミックスしたクリオージョ・スタオルで書かれている。マーク・エデンとクリストファー・ステルのデュオが演奏した〈Per Suonare Due for Two Guitars〉は、5楽章から成る作品で、演奏の順序は自由に決めることができる。この作品には、コミカルな要素があり、演奏者がお互いにおもしろい顔をするとか、同じフレーズを競って演奏したりした。エデンとステルは共にロンドンの王立音楽アカデミーを卒業し、雑誌「グラモフォン」の編集者選賞を受賞しており、ジュリアン・ブリーム以来のギタリストということになる。

休憩後は、再びカナダ・ギター・カルテットが舞台上がり、組曲〈遠い歌〉(Canciones Remotas) から〈Cambio el ritmo de la noche (Changed the Rhythm from the Night)〉を演奏した。この組曲は、カメラータ・ロミオ弦楽オーケストラのために書かれた作品だが、以来楽章ごとにギター・オーケストラやギター・カルテットに編曲されてきた。第3楽章は、キューバの芸術家ダゴベルト・ハキネット (Dagoberto Jaquinet) の作品に触発されて書かれた作品で、力強いシンコペーションと拍子が頻繁に変わる、元気のいいおどけた曲である。

ラファエル・スミッツが、活気のあるエレガントな音で〈シンプルエチュード第7番〉と〈悲歌〜イン・メモリアム・

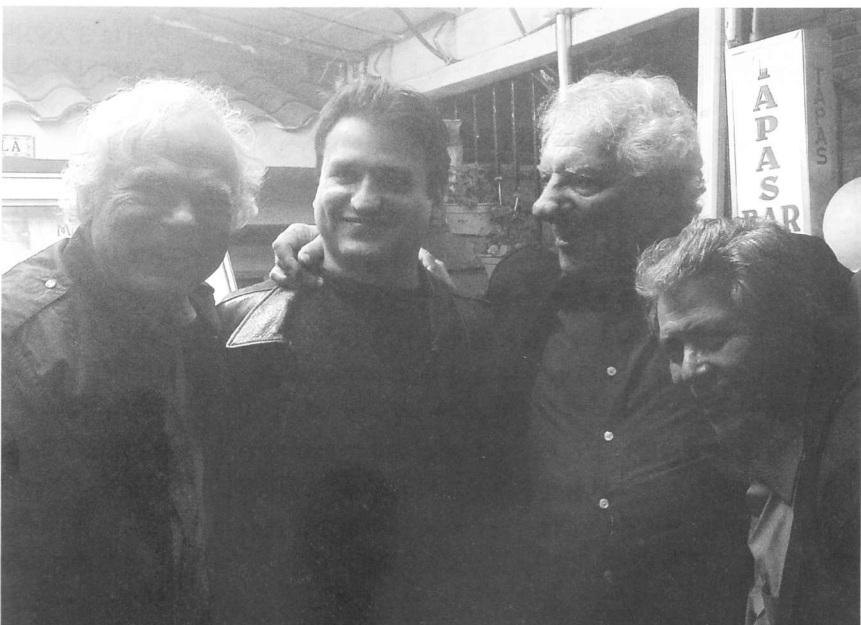
トオル・タケミツ〉を演奏した。ブローウェルは、この〈悲歌〉を親友の一人である作曲家、武満 徹を回想して書いた。曲は鐘を模倣した音に始まり、武満音楽で非常に重要な呼吸する沈黙を表現している。スミッツは、アントワープとブラッセルの王立音楽院でクラシック音楽を学び、スペインでホセ・トマスに師事した。彼女は現在ベルギーのレメンズ音楽院のギター科主任教授である。

コンサート最後にオダイル・アサドが演奏したのは、ブローウェルが彼のために書いたギターソロの新曲〈ソナタ・デル・カミナンテ (旅人) 〉だった。数日で書き上げられたこの作品は、ブラジルの土地とその詩的で壮大な風景を音楽的に表現したもの。オダイル・アサドは、兄セルジオとのデュエットを継続しており、来年はチェリストのヨー・ヨー・マ、ピアニストのキャサリン・ストットとのツアーが計画されている。

●ジョージ・モレル 80歳

アルゼンチンのギタリスト兼作曲家であるジョージ・モレルが、80歳の誕生日をマンハッタンで祝ったことを記しておきたい。彼の娘、フランセスカは、祝宴に出席するためボーイフレンドと共にニューヨークに飛んできた。この祝宴は、モレルの永年の友人で、ルーティ

アー・ミュージック・ストアのオーナーであるトニー・アコスタがホストになり、マンハッタンのミッドタウンにあるスペイン料理店で行なわれた。招待客の中には、ギタリストのジーン・ベルトンチーニ、ブラジルの作曲家兼打楽器奏者のティアーゴ・デ・メロ、クラシック・ギタリストのレネ・イスキエルド、ギタリスト兼チェロ奏者のアナ・マリア・ロサド、ジャズシンガーのハイジ・ヘプラー、ルーシアー・ミュージックのスタッフ、そしてモレルの弟子で現在13歳の驚異的な才能をもったギタリスト、ジョナサン・ボーディアンが含まれていた。招待客は、代わる代わるモレルのために演奏し、歌った。彼の弟子のジョナサンは、モレルの〈ファンタジア・アメリカーナ〉と、モレルが編曲したデイヴ・ブルーベックの〈テイク・ファイブ〉とガーシュウインの〈アイ・ゴット・リズム〉を演奏した。レネ・イスキエルドはブローウェルの〈キューバの子守唄〉を演奏した。ジーン・ベルトンチーニが演奏したときには、レストランのオーナーがいろいろなポットや木製のスプーンを持ってきて、ティヤン・デ・メロのパカシオンをサポートした。マイケル・ラモのギター伴奏でヘプラーが、ジャズのスタンダード・ナンバーを数曲歌った。クローキングはジャック・ローレンスの詩にウォルター・グロスが曲をつけた〈Tenderly〉という歌だった。



左から、ジーン・ベルトンチーニ、ラネイ・イスキエルド、ジョージ・モレル、トニー・アコスタ
Photo: Julia Crowe